

pianist



GINKO

■ pianist ■

パーティー会場はまだ何の用意も始まっておらず、がらんとしていた。

中央にグランドピアノが置いてある。

僕はピアノの前に座ると、鍵盤に指を走らせた。

タイ、バンコク。このホテルに妻とふたりで滞在するのは今日で3回目になる。

最初は結婚式。新郎新婦と両親だけの、ささやかな式だった。

僕は新人ピアニストで、ソロCDの第2集を出せるかどうか、という時期だった。

2度目は5年前。結婚当時の約束通り、結婚5周年をここで祝いした。

「あっ!?!」

ホテルスタッフの声に振り返り、僕はピアノから離れた。

「今日、ここを予約した者です」

「ああ、そうでしたか。随分早く到着されたんですね。準備はこれからですよ」

軽く会釈して会場を出ると、僕はホテルから出て、街の雑踏にまぎれて歩いた。結婚した頃に比べれば高層ビルが増えていたが、マーケットはほとんど変わっていなかった。物売りのかけ声や値引き交渉のやりとり、道行く人々の隙間を駆け抜けていく子供たち。韓国の市場（シジャン）とはまた違ったにぎやかさで、たくましく生きる人々の顔がまぶしかった。

『奥様からのプレゼントをお預かりしております』

そう書かれた招待状がこのホテルから届いたのは、1ヶ月程前だった。

数日後、支配人からの電話に僕は何とかスケジュールをあけたことを伝えた。

幸いコンサートの合間の移動日だったので、1日だけオフにしてもらったのだ。

「驚かれたでしょう!?!」

そう尋ねる支配人こそ、電話の向こうの声は感慨深げだった。

妻からのプレゼント。僕にはそれが何なのか、おぼろげに見当がついていた。

「5年後に、またここで乾杯しましょう！」

結婚式の夜、妻は僕にこんな提案をした。

5年後にはきっと僕のCDがヒットしているから、結婚5周年の記念日にはこの最上階のスイートルームに泊まろうということだった。

妻の予想はおおかた当たったが、残念ながらスケジュールの関係で、結婚記念日当日の予約はできず、しかもまだ最上階という訳にはいかなかった。もちろん、それでも僕は十分幸せだったが。

「だからあの日、5年後の予約を入れておいたんだね」

妻は結婚記念日に来られなかったことがよほど悔しかったらしい。

「でもさ、5年後にすっかり落ちぶれているかも、とは思わなかったの？」

妻は笑っていた。

彼女は僕と出逢った時から、僕の成功をみじんも疑わなかった。

僕の一番のファンで、理解者だった。

10年前、僕と妻が知り合ったのはこのホテルだった。

マンハッタンの銀行に勤めていた妻は、韓国系アメリカ人。僕はやっと1枚目のCDを出せただけの、自称、新進気鋭（笑）の韓国人ピアニスト。妻は仕事で、僕は音楽祭出演のため、このホテルに滞在していた。

ある日の午後、オープンカフェでテーブルに置いた僕のCDを指差し、『あなたもこのピアニスト好きなんですか!?!』と聞いてきたのが妻だった。

その本人だと気がついたときの彼女の顔、今も鮮明に思い出せる。

この話をすると妻は真っ赤になって恥ずかしがったが、あれは僕らの第一歩だから、絶対に忘れない。

ゆるるろうそくの火の向こうに、妻の笑顔がある。

白いダマスク織りのテーブルクロスに並べられた食器やグラス。テーブルの上はもちろん、テーブルやピアノの周りにもたくさんの花々が飾られていた。

すべて5年前に妻が細かく指定したのだそうだ。

もちろん今日は結婚記念日で、最上階のスイートルームが予約されている。

2年前に就任した支配人によると、前任者から仕事を引き継ぐ際、この予約のことを何度も念押ししていったそうだ。妻がどれだけ今日という日を楽しみにしていたか、しみじみと感じた。

「この5年、君を想わない日は無かった。いつもそばにいてくれてありがとう」

実際のところ、妻はニューヨークに住み、僕が韓国とアメリカを行ったりきたりする生活で、普通の夫婦のような暮らしにはならなかったが、かえって一緒にいる間の時間は濃厚で、ふたりとも不満は無かった。

花に囲まれたグランドピアノに座り、僕はセレナーデを弾いた。
去年出した3枚目のCDに収録されている曲で、妻への想いを込めたものだ。
弾きながら振り返ると、そこには優しいまなぎしの妻がいて、照れた僕は少し唇
の端をあげて応えた。
何も言わずに僕を見つめている妻。
ふと、「愛してる」と妻の声が聞こえた気がした。

この5年、あなたには辛いことのほうが多かったわね
でも、こうして健康でいてくれて良かった
演奏活動を続けてくれたこと、ほんとうに嬉しかったわ

急に目頭が熱くなり、まばたきをすると、ぱたぱたと涙がこぼれた。
こんな風に泣いたのは久しぶりだった。

鍵盤からそっと指を離すと、僕はひざに手を置き、ひとつ深呼吸をした。
そしてテーブルに向き直り、しばらくの間、妻の笑顔を見つめた。
出逢ってから今日までの思い出が、走馬灯のように駆けめぐる。
辛くて苦しくて、ピアノの前に座れない日もあった。そんな時、彼女は今と同じ
穏やかな笑顔で励ましてくれた。何も言ってくれないことに腹を立てたこともあ
ったが、今はそれすらも優しさに思える。

「そろそろ時間だね。君が予約してくれた、最上階のスイートルームへ戻ろうか」

僕は妻の椅子を引くと、そこに置かれた写真パネルを手を取った。

ここで乾杯した3日後、5年前の今日、9月11日。彼女は取引先の商社との早朝
会議のために、マンハッタンのワールドトレードセンターにいた。
僕は東京でそのニュースを見た。
すぐにニューヨーク行きのチケットを手配したが、混乱でどうにもならず、妻の
消息を知ったのは8日後だった。

あれから5年・・・。

「素敵なプレゼントをありがとう」

僕は妻にキスし、抱きしめた。
写真の笑顔はそれを見る僕の気持ちにに応じて表情を変える。今日は満ち足りて
結婚した時のようにはにかんだ笑顔だった。

-- end --

最後まで読んでくださってありがとうございます。



このお話をブログで発表したのは2006年9月14日でした。
「あれから5年」というテレビ番組を見て、一気に書き上げたものです。

さらに5年経った今日は「あれから10年」の特集番組が放送されていました。

映像の力は想像を超えるインパクトがありますね。

50年、100年かかったとしても
あの日の哀しみの根源が取り除かれるよう願います。

東日本大震災が起こって、Pubooで公開するのをためらっていましたが
9.11への追悼の意を込めて公開することにしました。

つたないお話ではありますが、
読んでくださった方の心に何か残れば幸いです。

使用した写真素材はこちらのサイトからお借りしました。ありがとうございます。

http://momoka.okasanta.com/site_sozai/billAndObj/bill008.html